

## 水難学会「事故調査委員会」の活動について —調査に参加して感じたこと—

油布 健太郎（大分県 由布市消防本部）、鈴木 直子（横浜市みなと赤十字病院）

### 1. はじめに

水難学会事故調査委員会は、2014年8月29日に新潟県にて上越水難事故調査を実施以来、今日までに全国各地で19回の現地調査と実証実験の活動を行なってきた。全国で発生する水難事故の①事故データの収集及び解析、②実証実験とその報告書の作成、③事故再発防止の知見に資するための普及活動を行っている。この度は、委員会委員の活動だけでなく、地元の会員・会員の繋がりから活動が成功したことについて述べる。また、今後の事故調査の活動についても提案する。

### 2. 印象に残る事故調査及び実証実験の紹介

#### （1）水難事故調査

2020年8月6日宮城県柴田町白石川で、町内の中学校に通う女子生徒5名（1年生）が水遊び中に発生した水難死亡事故について、事故発生時期に合わせた、翌年（2021年）の8月1日～2日の日程で調査を実施した。

- 1) 事前に調査の案内文を委員及び会員へ発信し、調査補助員及び作業見学者を募集した。
- 2) 当日に事故調査委員会委員に加えて、より専門的な分野から、大学技術職員、プロダイバー（企業協力）、による調査補助。また地元消防職員（会員）の協力により、当日の救助の状況を所轄消防署職員から聴取が出来たことなど「地域との繋がり」や「専門分野の高い技術力」が一つになり、結果が導かれた印象的な調査であった。

#### （2）実証実験

2022年4月23日に発生した「知床遊覧船沈没事故」に関連しプールで実証実験を実施した。実験は、2023年2月26日宮城県大崎市立鳴子小学校の屋外プールにて、外気に晒された環境で防水スーツを着用し人体の保温状況の把握を目的とした実験的検証を実施した。今回の実験会場をご提供いただいた小学校は、地元指導員が毎年、数年間に渡って講習指導に当たり、その深い繋がりから快く貸出いただけた。

この実験は冷水環境のため、帯同医師・看護師が必要となったが、有資格者の会員の協力により人員を確保することができた。また、被験者、安全管理要員、および実験を準備し計測に関わる人員確保が課題であった。しかし、被験者として協力いただいた地元会員（消防職員）の声掛けに興味を持ち、8名の消防職員が補助員として参加してくださった。この協力がなければ、今回の記録を得ることが難しかったと感じる。この実験は、「ういてまで」講習会・人と人・関係機関との連携により、初めて成果を得るといふ形となった印象的な実験であった。

### 3. おわりに

水難学会「事故調査委員会」は、事故調査を実施し始めてから10年目となる。専門知識かつ高度な情報処理技術を必要とするが、全国各地で事故調査を行う上で欠かせないのが地元会員の協力である。つまり、施設の利用・被験者・各スタッフ等の協力があって成立するものである。

今回の2つの事例から、事故調査委員会の活動は、まず、「ういてまで」講習会から得た信頼と、講習会の歴史による繋がりの可能性を感じた。そして、地元関係機関への参加依頼及び地元関係者からの情報提供により、地域に根差した活動や地域防災にも繋がると考えられた。

この2点について、これからの事故調査活動の中に取り入れることを提案し、水難事故「0（ゼロ）」を目指し、今後も活動を進めたい。